

## 袖子忌

山田真砂年

白波の消ゆる間もなし袖子の忌  
袖子忌のけふ夏雲の耀けり  
園児らのマスクすぐずれ柿の花  
葉から葉へ躊躇ひもなき毛虫かな  
余りもの食うて土用の一日過ぐ  
月見草揺れて小暗き御師の宿  
地上には空あり蚯蚓よぢれをり  
鎌倉や蛇の出さうな五月闇  
紫陽花のいぢわるさうや隣家に咲く  
合歓の木に風を待ちをる夏帽子  
昼顔の寄る辺の笹を強く抱く  
万緑を抜け出す坂を登りけり  
むしむしと栗の花散る昨夜の雨  
百段を上り下りして夏鶯  
落口の余すことなき梅雨の滝  
苔の花路傍の石のみな仏  
未央柳誰も守らぬ信号機  
床板を鳴らす素足や梅雨晴間  
茫々と海あり梅雨の結願寺  
実桜や鳥の聞きなし二つ三つ  
梅雨茸下枝（しづえ）に落し物のタオル  
枝しならせモリアオガエルの卵揺れ  
ぎしぎしと音して夏草の踏まれ  
流木は鯨の骨のごと涼し  
レーダーに万緑の陸現れり